九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本近代文学におけるヒステリーの表現

朴，美姾

https://hdl.handle.net/2324/4784710

出版情報：九州大学，2021，博士（学術），課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	朴　美姪
論　文　名	日本近代文学におけるヒステリーの表現
論文調査委員	主　査　九州大学　准教授　西野常夫 副　査　九州大学　教授　松本常彦 副　査　九州大学　教授　波潟　剛 副　査　名古屋大学　教授　飯田祐子 副　査　慶応義塾大学　教授　小平麻衣子

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、日本近代文学においてヒステリーという言葉がどのように用いられ、また人物におけるそうした症状の表現が物語の中でどのような意味を担っているかということについて考察している。

小説などの物語を創作する際、人物の性質をどのように定めるかという作業はきわめて重要なものとなるが、ヒステリーはその人物の言動を左右し、結果として、人間関係に問題を引き起こしたり、その他様々な出来事の誘因になりやすい要素として近代以降の日本文学で好んで用いられてきた。しかしながら、ヒステリーの定義や範囲は必ずしも明瞭なものではなく、また作家による表現のしかたも一様ではない。そういう意味で、文学作品におけるヒステリーの表現の研究はあいまいさを払拭するのが難しいと考えられるが、本論文は調査と分析を緻密に積み重ねることで、そうしたあいまいさをかなりの程度にまで解消し、一定の説得力のある研究として成果をあげていると評価できる。ヒステリーの表現と思われるものが見られる作品は数多くあるが、本論文では、ヒステリーが作品のテーマやストーリーにとくに大きくかかわっていると思われるものを選び取り、詳しい考察を加えている。その結果、文学におけるヒステリーの表現には、それぞれの作家の個性によるだけではなく、時代や文化思潮の変化によっても、様々なバリエーションが生み出されていることを浮き彫りにすることに成功している。各章の概要は以下の通りである。

序章では、ヒステリーという概念の文化史的な意味について説明している。さらに、先行研究を踏まえつつ、本論文におけるヒステリー研究の方向性について説明している。

第１章「明治期におけるヒステリーと神経病」では、ヒステリーという言葉が頻繁に用いられるようになる前に神経病という言葉がやはり頻繁に用いられる時代があったことを踏まえ、両者の関係を探っている。さらに、神経病という言葉の大衆化に影響を与えたといわれている三遊亭円朝『真景累ヶ淵』の中でその言葉がどのように用いられているのか検討し、ヒステリーの症例があらわれていると解釈できる人物像や場面について指摘している。

第２章「ヒステリーの妻たち」では、家庭の妻に焦点を当てて考察している。岩野泡鳴「五部作」と夏目漱石『道草』の分析では、妻のヒステリーが「五部作」では家庭崩壊を生み出す一因として描かれている一方で、『道草』では家庭を維持する「緩和剤」になっている点に注目し、ヒステリーというモチーフの対照的な使い方が存在することを確認している。さらに芥川龍之介「二つの手紙」と広津和郎『神経病時代』を取り上げ、前者についての考察では妻のヒステリーがドッペルゲンガーを発現させるという神秘的な考え方について確認し、後者についての考察では、トルストイの小

説『クロイツェル・ソナタ』やチェーホフの小説『決闘』に見られるヒステリーの表現を念頭に置きつつ、妻のヒステリーが主人公の神経病の一因となっている点を確認している。

第３章「女の語るヒステリー」では、女性登場人物のヒステリーについて女性作家が語るとどうなるかという観点から考察している。作家岩野泡鳴の元の妻であった岩野清の「枯草」、宮本百合子の「縫子」においては、男性中心的な社会において抑圧されがちな女性のヒステリーを生み出す状況に対する批判がヒステリーの表現を通じて表明されていると指摘している。また本論文で唯一の考察対象となった評論として与謝野晶子の「姑と嫁に就て」を取り上げ、当時において、ヒステリーが女性の教育の普及によって軽減できる可能性が同論で示唆されていたと指摘している。

第４章「創作と医学 ― ヒステリー患者と物語 ―」では、ヒステリーについての医学的知識がどのように機能しているかという観点から考察している。有島武郎の「或る女のグリンプス」と、ハヴロック・エリス『性の心理』を参考にして改作した『或る女』においては、ヒステリーを女性固有の病気と考えた有島がヒステリーを媒介に女性の悲惨な人生を強調しようとしたと指摘している。さらに、日本において初めて精神分析を素材にした作品であるといわれている佐藤春夫『更生記』、精神分析医を主人公にした三島由紀夫の『音楽』においては、医学的知識を駆使することによってヒステリーをストーリーを展開させる道具として用いていると指摘している。

日本近代文学にあらわれるヒステリーについての研究は従来、個々の作品内の考察にとどまりがちであった。本研究は、作品群を分類し関係づけるという方法論を導入し、時代や思潮の変化に応じて文学作品におけるヒステリーの表現にも一定の変化や傾向が存在していることを明らかにしている。以上のような成果に鑑み、本論文は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと判断された。